準備委員会企画 招待講演 1

教育と版画家への道

松 原 直 子
(版画家)

Education and My Path to Woodcut

Naoko MATSUBARA
(A WOODCUT ARTIST)

本日はお招きいただきありがとうございます。一昨日から風邪気味で、今朝からはとうとうこんなひどい声になってしまいました。お聞き苦しいかと思いますがご容赦ください。私の作品をスライドにしておりますので、それを交えながらお話をさせていただきます。

絵描きや彫刻家、工芸家にとって、教育とは、何を意味するのでしょうか。古今東西の芸術家達の中には、いわゆる正規の教育とは関係なく、個人で苦労しながら、自分の道を四苦八苦して見つけ出し、世界に寄与した優れた芸術家になった人も多くみられます。

本日は私が受けた教育について述べてみます。

私は終戦後の日本を、子どもたちを、皆で立て直したいという気概に支えられて、子ども時代を過ごしたという記憶があります。

I 大学での出会い、版画との出会い

高校を卒業する頃、どの大学で何を専攻してよいか分からず迷っていました。母の知人から、「子どもの時からずーっと好きだったものは何？」と聞かれて、即座に「絵」と答えた時、彼女から実にさりげなく「では、美術大学に行けば」とアドバイスされたのが、この道に入ったきっかけです。

父からは「浪人はさせない。すべったら短期大学にやり、嫁にゆかす」と、宣言されました。それで地元的美大を受験しました。

京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）は戦後、大学という名前に昇格した日本で一番古い美術大学です。（明治13年、1880年創立）多くの寺社に囲まれた東山七条の坂の上に、ぼろぼろの校舎がありました。そこに

超一流の秀れた教授陣、日本画科には、上村松篁、榊原紫峰、秋野不矩、猪原大華、陶芸家には、富本憲吉、藤本能道、近藤悠三、小山喜平らの教授が居並び、彫刻家には、辻晋堂、堀内正和、染織科には、小合友之助、稲垣稔次郎それぞれが、後に重要無形文化財保持者、人間国宝、文化勲章などに輝かれた芸術家揃いでした。そして私たちの工芸科は、ドイツ・バウハウスで建築を学んだ上野伊三郎とオーストリア人の妻上野リチ（Felice “Lizzi” Ueno-Rix）が中核となって指導されました。私のクラスは、3人の女性と17人の男性の学生でした。

私の主任教授はリチ先生であり、美術、工芸、デザインに関する優れたオリジナルな指導を受けました。京都美大に入った事で、私のアーティストとしての道が真っ直ぐに開けた事は、私の生涯にとって、偶然では済まされない幸運であったと、今も感謝しています。ここでは、美大の学生時代になった一度だけあった、木版の授業風景を描写することで、リチ先生の並外れた美術教育の一端を紹介します。

「イですか。この板イ匂いします。木のイ匂いですね。今その刀で、ごりごり彫ってみてください。どですか。イ気持ちしますね。この線、刀で木を彫った線です。これ鉛筆の線と違います。筆で描く線とゼンゼン違います。よくみてください」

京都美大二回生だった私は、その日リチ先生からこうして木版制作の手ほどきを受け始めました。当時リチ先生は60歳をこしておられたのでしょうか。ヴィエナ・セッションのヨーゼフ・ホフマン（Josef Hoffman）の愛弟子としてウィーン工房で活躍され、ドイツ・バウハウスに留学し、ホフマン建築事務所で働いておられた建築家、上野伊三郎氏と結婚され、日本に来られ

たのは1925年の事です。並外れた才能と国際ビジョンを持たれたこの国際結婚の草分けのカップルが、幸いデザイン科の主任教授として、あらゆる分野のデザイナーを養成する中核をなしておられました。長い日本滞在にもかかわらず、リチ先生の日本語は非常におぼつかなく、授業にはいつも上野伊三郎先生が通訳として付き添われていました。ドイツ語と日本語のやり取りの授業風景は、戦後間もない日本では、奇妙にさえ感じられた時代でした。

通常白黒の木版画を習うなら、まず下絵を筆と墨で、薄い和紙にきっちりと描きます。それを裏返しにして版木に糊ではりつけ、乾いたら、下絵の通りにきめられた様々な版刀でいいいに彫っていきます。様々な刀をうまく使い分けるのに、長い修業を要します。刷る技術を学ぶのは、もう完全に職人技を目指すこととなります。

リチ先生の言われた様に三角刀と丸ノミで、桂の版木を手当たり次第に彫り込み、ひっかき、殴りつけ、突き進めていくと、いたずら坊主がはじめてジャックナイフをもらって、何でも彫りまくる様な快感を覚えました。筆で紙にすると直線や曲線を描くようには運びません。現れた線は無骨であり、丸は角だらけで、木目に沿って彫ればスムーズな線でも、直角に彫ると、ギザギザの線があらわれます。そして、そのガジガジ彫りの版木から、木屑を取り去り、油性のインクをローラーでおき、和紙をのせて、裏からこすって版画を刷る工程を習いました。そこですかさずリチ先生はおっしゃいます。「今刷ったばかりのガジガジ彫りの版画があなた方の指針です。これからその版木の裏に、“世界の風物”という題で、版画を創作しなさい」この色彩・構成 Color and Composition と呼ばれるリチ先生の4時間の授業は、フランツ・チゼック (Franz Cizek) がウィーンで、幼児美術教育から発展させた方法からきていました。これは、従来のアカデミックな技法重視の指導法に対し、“自由”に作者の創造性 (ファンタジー) を展開し具体化させるものとして、デザインの基礎教育の極めて柔軟性に富んだ方法でした。チゼックの授業法は、後に、ヨハネス・イッテン (Johannes Itten) によって、ワイマールのバウハウスにも伝えられた、いわゆるモダン・デザイン教育の基礎として世に広がりしました。

リチ先生の授業では、課題の作品を色紙のコラージュであれ、段ボール紙のオブジェであれ、芋版の絵巻物であれ、その日のうちに完成して提出することになっていました。それは、いかなる模倣も容赦しない

という師の教育方針に基づくものでした。

素材を忠実に学び、その特性を生かすことを第一義とし、「祭」「サーカス」「鳥」「虫」「花」といった先生の出されるテーマに何の予備知識もなく、その場で一気に取り組むのです。それは、時間をかけて捻出したものより、気迫に満ち、知識や理性の入り込む余地のないもので、忘我に近い境地に我々を導きました。

その日、私は、下絵も何も描かない版木に生まれて初めて「中国の踊り」を制作しました。本物の踊りを見たわけではない、さもありなんと想像するファンタジーを木という素材の持ち味にとけあわせる練習です。

4年間の大学生活の間、先生について木版画を学んだのはこの時限りでした。あの明るい午後の教室で、私が会得し、魅惑された木版の世界に生涯首を突っ込むことになろうとは、あの時誰が想像しえたでしょう。あの日、刷りたての私の初作を見て、満面に笑みをたたえ、全身を喜びで一杯にされて、「ヴンダバ Wunderbar (すばらしい)」と叫んで、私の肩を揺すって下さった恩師は、他界されてすでに40幾年になります。

II カーネギーメロン大学への留学

多くの大会社から引っ張りだこで就職していった同級生の中、私一人、リチ先生の優れた指導でかいま見た芸術の世界のあまりに奥深く幅広く、一番にしたいことは何なのか迷い、どうしても進路が決まらず悶々としていました。リチ先生に相談すると、「日本を離れ外国に留学しなさい。そうすれば、自分のしたいことが見えてきます」という忠告を受けました。しかしそれは、貧しかった戦後の日本では、行く先から奨学金を全額支給されない限り不可能でした。幸い受験したフルブライト留学試験にパス出来、また、カーネギーメロン大学からもアシスタントシップをいただき、1961年、日本を離れピッツバーグにあるカーネギーメロン大学の大学院の学生になる夢が叶いました。

この大学は、元の名前が工科大学、すなわち、サイエンステクノロジーの優れた教育をする大学としてスタートし、そこに、芸術大学、ホームサイエンスの両校が加わって成立していました。この伝統ある立派な芸術大学には、音楽科、演劇科、建築科、絵画彫刻科、工業及び商業デザイン科、陶芸科などの科がそれぞれ独立して総合芸術院があり、鉄鋼王カーネギーが私財を惜しみなく使って建てた美しい6階建ての石造のビルにおさまっていました。大学院の学生として、5階の見晴らしの良い大きなアトリエが振り当てられていました。

ディーン・ライス (Dean Rice) 博士から、私に、この大学院に在籍する間、この総合芸術院のどのクラスに行って、いかなる授業を受けても見学しても構わないが、義務づけはしない。だが、ここに居る間に何か自分の方向を定め、一つ誰も掘り下げた事のない深い穴を掘り下げてみてはどうだろう、というアドバイスをいただきました。

年月が経って、アメリカ各地の大学院の実態が分かって来た時、この博士のアドバイスがいかに賢明なものであったかを悟り、感謝にたえませんでした。ともあれ、多くの講義に顔を出してみても、私の英語力では、到底ついていけないと悟り、さっさと自分のアトリエに引き上げてしまいました。商業デザインのメッカにやってきて、その方向を勉強してみようと最初考えていたにもかかわらず、アメリカのまっただ中にやってくると、急にその方向に興味を失ってしまいました。美大の卒業制作に杜子春のイラストを手がけ、この方向をもっと勉強したいと思いました。また、京都大学の病院の食堂の壁画を手がけた経験からも、壁画の方向にも惹かれ、断然テキスタイル・デザインもやりたくなっていました。それで、大学院の教授について、アップリケの巨大な壁画を試み、石版を一から習い、西洋のカリグラフィーを勉強しました。また、裸体のクロッキーの教室にも通いました。一体どんな穴を掘ったらよいのだろうか、10月も終わりにさしかかり、まだ、何もはっきりした方向が掴めていないので、あせり始めていました。

そんなある日、友人たちが、ピッツバーグでラビ・シャンカルのコンサートがあるので行かないかと誘ってくれました。1961年のその時点では、ラビ・シャンカルが誰なのか、インドの楽器シタールでさえ、見た事も聞いた事もなかったのです。その晩、初めて耳にしたその楽器の音色、複雑なリズムの美しい旋律、タブラ奏者との息の合ったこのインドの音楽の世界に心身を奪われる様に聞き惚れました。感動で体がふるえる経験でした。スケッチブックも何も持参していなかったのです、小さなプログラムの端に鉛筆で奏者の形を落書きしました。

翌朝、大学に着くなり、昨夜の感動を何とかして、大きな木版で表現したいという思いにとらわれて、友人に何でも良いから木版の板を手に入れて欲しいと泣く様に懇願しました。持ち込まれたのは、建築の下地に使われる厚さ2センチメートル程の8×4フィートの大きなベニヤ板でした。これを2×3フィートに切り分けました。コンサートの感動を何とかして表現し

たいと、久しぶりに版木に立ち向かいました。日本から持参した丸ノミと三角刀だけで、おそろしく固いベニヤとの格闘の日々が続きました。3週間ほどかかり、やっと二枚目の版画が彫り終わって、油性の黒インクで、これも日本から持参した和紙に刷ってみました。その初刷りを眺めながら、私の内部から、「お前が探して求めていた掘り下げたい穴とは、この木版画のことではないか」という声が聞こえてきました。

その内なる声を聞いて以来、迷いから解放され、私は、ただ溢れ出てくる気持ちを木版画にたくして、まっしぐらに制作する日々を何ヶ月か過ごしました。それらは、潜在意識として私の中にあったイメージだったり、また、新しい生活の中で見いだした生き生きとしたフォルムからのインスピレーションだったりでした。

日本を出た時、遠くアメリカにまで留学して、まさか、古くさいと思われる木版画の道を追い求めようとは、夢にも考えていませんでした。それに、シャンカルの音楽会からのインスピレーションを、絵画や彫刻でなく、版画の中でも、石版やエッチングで表現したいと思わず、どうしてひたすら木版画の効果を求めたのか、今もって謎です。

日本から遠く離れ、西洋の文化にどっぷりと浸かりながら、シャンカルという天才音楽家を介して、初めて何が一番したいのかを、はっきりと見いだすことができたのです。これは、長い私の人生の中で最も幸運な出来事だったと思わずにはいられません。大きなアトリエをシェアするM嬢は、大変勤勉で才能ある学生で、ついたてを中に、M嬢はクレーバりの油絵をじゃんじゃん描き、わたしは、黒々とした大きな木版画をどんどん刷り、二人は競争のように制作に没頭しました。

III イギリスへの留学

私はたった一年で修了する事になったので、修了する5人の絵画部や彫刻部の大学院の学生たちと大学の画廊で、修了制作展に加わりました。その時、たまたまテキサス大学からカーネギーメロン大学出版部に所用で来ておられた英国人のデザイナーが、この展覧会を見られ、その足で私のアトリエに飛び込んで来られました。

彼は長年スイスにあるグラフィスという雑誌のブックデザインを手がけた方で、目下テキサス大学出版部の主任編集者をしておられたキム・テイラーという方でした。彼は私のアトリエに入って来られるなり、大

変な早口の英国英語で、修了展覧会で私の木版画に初めて接し、非常な感銘を受けたこと、ついては、自分がアート・ディレクターを務めるテキサス大学の Texas Quarterly という文芸季刊誌にあなたの作品を大々的に紹介したい。それで、さっそくだが、と切り出されました。

「まず、自分の生い立ち、木版画との関係、作品の裏にある思想などを、2500 から 3000 語くらいにまとめて当編集部に至急送って欲しい」と言われました。降って湧いたこの唐突な話に仰天し、たじろいだ私は、おずおずと、実は修了するとすぐに、ヨーロッパへの旅を計画していること、そんな難しい文章を書く時間が全く無く、まして、英文で書くのは、私には荷が重すぎることを訴えました。テイラー氏は、すかさず、「ああ、それなら、ロンドンの王立美術大学の主任が私の親友ですから、留学出来る様に頼みましょう。イギリス第一と言われる学校で学ぶことは、あなたにとってプラスになるでしょう。そこで、落ち着いて、お願いした文章を、日本語で書いて送ってください。そうすれば、こちらで英訳します」。うんともすんとも言わず、こう宣言した彼は、そのあたりに散らばっていた私の作品の中から、15 から 16 点選ぶと、これらを筒に巻いて出版部まですぐに送ってくださいと指示するなり、すたすたと引き上げて行かれました。

それから2週間経った頃、テイラー氏の約束を裏付ける様に、ロンドンの The Royal College of Art から、美しい便箋に、「あなたを当大学、版画部に招聘します。いつでも在学可能であり、当大学に隣接するヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の閲覧室で、古今東西の版画を勉強することも許可します」と書かれた、ガイヨット学部長からの手紙が届きました。テイラー氏の誠意が伝わって来て、この降って湧いた未来の軌道が、信じられない思いでした。でも折角大学院を修了出来たばかりで、ゆっくりヨーロッパを旅しようと思っていた矢先だったので、「あー、また勉強かいな」といささかうんざりしたのも嘘ではありません。

後々気がついてみると、キム・テイラー氏は、卒業寸前の未熟な私の仕事の価値を真っ先に見だし、Texas Quarterly という非常に優れた季刊誌に発表してくださり、広く世界に紹介してくださった恩人でした。

ニューヨーク港から、ホーランドアメリカンラインに乗りこんだ私は、一年間、私を育み、教え、導き、私の可能性を見だし、未来への道を開いてくださっ

た大らかで暖かい人々の国アメリカを泣きじゃくりながら、旅立ったのでした。

私の正規の教育は、このイギリスでの伝統ある王立美術大学での滞在で終止符を打ったわけですが、それからかれこれ 50 年という人生を版画家として歩んできました。アートはいつも、生活の反映でした。その時代時代で、何か世界中の誰もやったことがない、新鮮で心に響いたものを木版画という限定された枠の中に押し込め、もがき苦しみ、苦心に苦心を重ねて作品を創作してきました。ここに、50 年間の作品群の中から私の歩んできた道をお目にかけながら、正規の教育を離れても、教育というものは、一生絶えることのないことを少し説明させていただきます。

この Inner Strength という作品作りに向かっていった時、最初大きな踊り子をイメージしながら、せっせと版刀を動かしていました。半分位出来たあたりで、調子を見ようと、版木から距離を置いて眺め、また版木を逆さまに立てかけて眺めると、踊り子よりも、一本の松の様な木が現れ始めました。それで、まっしぐらにその松のイメージを追いかけて、創作したのがこの作品です。その頃私はニューヨークのど真ん中の小さなアパートに住んでいて、出来上がった会心の作を壁に貼付けていました。

ちょうど、日本から私を訪ねて両親が来ましたが、父が一步その部屋に足を踏み入れるなり、「あれはうちの松じゃな」と叫んで、その版画の前に近づいて行きました。それで、父が宮司を務める建勳神社の境内に生えていた美しい老木の松に思いあたり、その松の姿を飽かず眺めて、子ども時代を過ごしてきたことを思い出しました。踊り子の木版から生まれた松の姿は、知らず知らずのうちに私の中にあった松の姿が抜け出してきたもので、その姿を見せたことに一種の驚きを覚えました。それがきっかけで、樹木のたくましさ、力強さ、優雅さを版画にすることに夢中になって数年を過ごしました。後年それらをまとめて、「木への賞賛」と題するポートフォリオを出版するに至りました。今日でも、私の leitmotif は木であり続けています。木版画を使った本の出版はまた好きな仕事で、アメリカで出会った面白い歴史や風物を本にしています。

IV 二度目の渡米

1965 年に、ニューヨークにある Pratt Institute や Pratt Graphic Art Center (プラット・グラフィック・アートセンター) で版画を教えながら、版画部の主任フリッツ・アイケンバーグ (Fritz Eichenberg) 博士の助手の一

人になって、ニューヨークのハリーエブラムス出版社から出される The Art of Print という版画の参考書作りに参加し、6 年を過ごしたことがありました。この経験は、創作ばかり続けていた私に、世界の版画の歴史を順を追って勉強する機会となりました。また、現在どういう新しい作品があるのか、どんな手法が世界の版画家たちの手によって使われて創作されているのかをかいま見る好機会となりました。また、アイケンバーグ博士は、世界的な木口木版画家であり、教育者としても、文筆家としても、編集者としても非常に優れた方でした。その方の傍近くで仕事をしてきて、非常に考えさせられた事は、彼の人生を貫くパシフィズムの思想でした。

1901 年ユダヤ系ドイツ人として、ライプチヒに生まれた彼は、二つの大戦を経験し、ナチ台頭を逃れて、ニューヨークに移民され、プラット・グラフィック・アートセンターという国際的な版画家の機関をマンハッタンに創設されました。ここの版画の季刊誌の中の彼のエッセーの一つをここに紹介し、そのパシフィズムの根幹を眺めてみたいと思います。

「19 歳の若者だった私は、コロンの本屋を読みあさって、ポケットマネーの大半を本を買うことに費やしていた。本屋で、ミュンヘンの Kurt Wolff から出版された美しい装丁に包まれた『MEIN STUNDENBUCH』という 700 部限定の本を見つけた。テキストはなく、ただフランス・マゼレール (Frans Masereel) による 165 枚の小さな白黒の木版画によってなっていた。彼は、フラングース出身であり、木口版画に彼の心の奥の人間性を簡潔に鋭く表現していた。この本は私に新しい世界をうち開き、私の言葉にならない言葉に、考えにならない気持ちに静かに力強く呼びかけた。あれから 45 年たった今でも、この本は、私の心と思想に非常に近い。もし彼の仕事現在のわれわれに何かを示唆するとすれば、芸術家の義務とは、我々が住むいかなる時代の問題にも真向から対処することであり、人間性の最も尊い仕事に関わりあうことであろう」

アイケンバーグ博士から学んだ版画家の中に、ドイツで活躍するハップ・グリースハーバー (Hap Grieshaber) という非常に優れた木版画家がいました。徹底したパシフィストであり、アイケンバーグ博士と同様に、人間の尊厳を損なうものに対する版画家としての戦いに徹していました。しかも彼の政治性を全面に打ち出したどの作品も、全く芸術性を損なうことなく、両者が輝いて人々に訴えかけていました。色を知りつ

くし、デザインを知り尽くした芸術家の力強さに満ちていました。彼こそは、グラフィック・アートとグラフィック・デザインの境界を取り去った稀な芸術家でしょう。私はこの天才に会いたくて、1970 年、ドイツのアッハルム (Achalm) に出かけて行きました。

1971 年ドイツでは、アルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer) の生誕 500 年を祝う為に、ヨーロッパの版画家達のコンペを催していて、最後にピカソとグリースハーバーが勝ち残っていました。ドイツ人の友人と私が彼を訪ねて、最初に聞いた言葉は「ピカソに勝ったぞ」という勝利の声でした。お会いするのに指定された場所は、アッハルムの市役所の前でした。大きな机の回りに、大勢の人たちが列を作っていました。見ると、出版されたばかりの大量の版画本を積み上げた前にどっかり座ったグリースハーバーが、サイン会をしている最中でした。この大きな画集の収益の全てが、当時独裁制に喘いでいたギリシャの独立運動家たちに寄与されるということでした。聞きしにまさるパシフィストぶりに感動しました。私の姿をみるとすぐに手招きして、彼の横に座らせられ、私にまで、彼の本にサインするように指示されました。

今振り返ると、ヨーロッパの様に、大破壊や人権蹂躪が戦争の度に繰り返され、国境が変わることが日常茶飯事であった国々では、大海に保護された島国、日本とは比べものにならない悲惨さをなめた長い歴史の繰り返しに遭遇し、そこからこそ、この根強いパシフィズムの思想が定着したにちがいないと考えます。

V 結婚・出産・版画

さて、1971 年暮、イギリス人でトロント大学東アジア研究所教授のデイビッド・ウォーターハウス (David Waterhouse) と結婚して、アメリカからカナダに移住しました。そしてすぐに健康で大きな男の子を授かりました。しかし、この出産は、難産で帝王切開でした。その手術で、高熱を出し体重が 40 キロまで減り、かつてない大病を患いました。誰の人生にも、個人的な苦しみはつきものですが、この時が、私にとっての受難の時代でした。

アメリカでは大勢の友に恵まれましたが、カナダではまだ友達も全くいない、日本食も無い、無い無いづくしの異国でのこの難産と病気でした。しかも、夫も私も生まれたての赤ん坊を前に、全く未知の育児という仕事におろおろして、ゆっくり休んで病気から回復できる余裕がありませんでした。体が極度に衰弱したためと、産後の精神状態のゆれから、私は生まれて初

めて、完全なノイローゼ（post-partum depression）にかかりました。このようなデプレッションにかかり、外国の地でそのまま亡くなった夫人もあると後々聞きました。あの苦しみは、なった人でないとわからないでしょう。激しいホームシックになりました。10年間のアメリカ生活で一度も味わったことのない、果てしないむなしさ、悲しさ、淋しさ、救いようの無い喪失感に打ちのめされました。なけなしの貯金をはたいて身分不相応な家を買ったので、日本に帰る余裕もありませんでした。

この地獄の様な苦しさから必死で這い出ようとする力となったのは、私の版画へのわずかな情熱でした。ホームシックになっていたわが故郷、京都の懐かしい思い出の山川、優雅な伝統芸能や絢爛たる祭りの音色、美しい寺社や老舗の連なる町のたたずまい、次から次へとわき起こる記憶の数々が、私の心を占めました。そこで、この記憶を頼りに少しずつ京都の版画を作ってみようと思い立ったのです。

さて、記憶というものは、写真やスケッチに比べ、不必要な事柄が拭い去られ、肝心な事象だけが心に残っているものです。それらを、木版画という言葉に置き変えて、どう料理し新しい生き生きとした版画に創造しなおすか、という大事業に、弱々しい力を振り絞ってチャレンジしました。

家事、育児、病気をかかえ、10点制作するのに、2年という歳月が過ぎ、さらに2年間かけて、全部で25点余の版画が完成しました。講談社インターナショナルで、『杜子春』『竹取物語』を出版していましたので、ここでまた出版することにし、英文学及び、和紙の研究者である寿岳文章先生が、ご病気にもかかわらず、序文を書いてくださり、版画のみの多彩色の『京都木版画集』が1978年に出版されました。その頃には、息子は幼稚園で元気に走り回っており、私のノイローゼはとっくの昔に、消えて無くなっていました。

VI 棟方志功との出会い・二人展

降って湧いた様な電話がかかってきたのは、1975年の初めだったでしょうか。電話の相手は、ジョーン・スタンリー・ベイカー（Dr. Joan Stanley-Baker）というブリティッシュコロンビア州グレートヴィクトリア美術館に赴任したばかりのキュレーター。「この度、カナダカウンスルから、大きなグラントを得たので、私が敬愛してやまない棟方志功の展覧会をしたいが、あなたの版画との二人展を企画したい。それで近

日そちらに作品選択のために伺います」との度肝を抜かれる話に、哑然としてしまいました。産後の病氣や育児の為、ろくに仕事もしていない時だけに、恐ろしくさえ思われました。彼女が訪ねて来られた時、一体どうしてこんな立派な版画家と、青二才の私との二人展を企画されるのですか、とたずねると、その答えは、さらに私をびっくりさせました。

外交官をされていた父親に伴われて、滞在先の世界各地を廻りながら育ったジョーンさんは、多くの言語に通じ、日本語もしごく堪能でした。彼女が家族と共に鎌倉に住んでいた頃、The Mainichi に、展覧会評を書いていたそうです。そして同じ鎌倉住まいの棟方志功をよく訪ねられたそうです。

「ある時、色々な会話を交わしていた時、何気なく志功さんに、日本人の版画家の中で誰の作品がお好きですかと尋ねると、即座に只一人、松原直子の名前をあげられました。それが、今回のこの展覧会の企画に繋がったのです」と話されました。有り難すぎるお話です。

ここで、少し前に私が書き留めていた、棟方志功についてのエッセーを紹介します。

『父の友人に、当時伏見稲荷大社に仕えておられたF宮司とおっしゃる芸術に卓越した眼力を持たれた方がおられた。彼は棟方志功の才能をいち早く見だし援助し、可愛がっておられたが、「F先生に捧ぐ」と棟方志功のサインの入った作品集など、惜しげもなく、これは直子さんの方が役に立つからと私に何冊も下さったりされた。ある時、F宮司様から「棟方が今大社に来ている。社務所の襖に絵を描くと、奥で描きはじめたらいい。今すぐ来れば、描いている所が見学出来るからよかったらおいでなさい」という有り難い誘いに、すつとんでいった。私たちの住まいは、京都の西北の端に位置し、伏見稲荷大社は、京都の東南の外れにある。どんなに急いで行っても、市電と京阪電車を使って二時間はかかる。学生の身分でそんな長距離をタクシーを利用するなどもののほかだった。息せき切って社務所にたどり着いた時、すでに八枚の襖絵は完成され、今しがたF宮司様も棟方氏も祇園に行かれました、と告げられ、がっかりしてしまった。お願いしてみせていただいた襖には、一目見ただけでは、何が何やら、さっぱり分からない墨の落書きのような絵が描かれ、まだ濡れている墨のしずくがあちこち火花の様に飛び散っていた。眼をこらしてしばらく眺めると、狐や稲穂、山々や鳥居らしき形が少しずつ見えてきて、所々黄色や、青が模様のように使われていたと

記憶する。混沌としながらも、それらが、きちんと絵図になっていた。たった二時間足らずで、こんなにのびのびと、襖八枚という大作をあっけらかんと描き殴り、すでに祇園で遊んでおられるという怪物みたいな芸術家に、どうしてもお目にかかりたいと思った。

1958年頃だったと思うが、上京する機会があった時、思い切って杉並の棟方先生のお宅を訪ねてみた。田舎のおっさんという第一印象の先生は、F宮司様のよろしくと書かれた名刺を渡すと、にこにこして応接間に通して下さった。郷里の青森から4、5人のお客様が来ておられ、東北弁での賑やかな談笑に混じって、私のこちこちの緊張も和らぎはじめた。リチ先生の木版の授業以来、暇が出来ると少しずつ白黒の版画を作っていたが、その稚拙な駄作数点をあつかましくも、この版画の神様に見ていただいた。

1センチもあるかと思われる分厚い丸めがねの先生は、私の作品に顔を近づけ、まるで紙を嘗めておられるように、端から端まで丁寧に一枚一枚みておられたが、恐ろしく太いしわがれ声でうなる様に、「うーん。いいねー」とおっしゃった。嬉しくて、心臓が激しく鼓動し、目頭が熱くなった。それが、棟方志功先生との最初の出会だった。

アメリカに渡り、計らずも木版に専念し修了制作の大作もほぼ出来上がる頃、棟方先生に、新作を見ていただきたいとなった。それで、大きな作品数点を筒に巻き、手紙と共に航空便で杉並のご住所に郵送した。

ある日突然、全く予期しなかった手紙が舞い込んだ。読みながら私は声を上げて泣いた。それは喜悅の絶頂からくる涙だった。勿体なくて、有り難くて、喉を締め付けられる感激に打ち震えた。躍り上がる様なあの独特の字で、あの特異な不思議な文体や言い回しの日本語で、棟方志功先生は、若かった私に何にも勝る激励の辞を贈ってくださった。それは、志功先生の乱暴に見えて、非常に整然としたご性格や暖かい人となりかにじみ出ていて、ここに少し引用させていただく。

「松原直子氏の木板画作品を多量に見ることが出来た喜びと驚きとの両方を味わいました。それは、よくこの大作を何の淀みもなく、板刀を駆使したということです。そして板画という、日本独自の木から生れる、刃物から湧く美の生命を、無量、多量に出しつづけて居ることです。わたくしの知る範囲で、女性板画家で、この圧倒的にも重量感と重圧的な木板画を生み出した作家を、この日本では珍しい程希有なことです。いや初めての存在としてみてもよいほどです。欧米の女性板画家とも会い語り、またその作品も見ましたが、こ

の様に、続々と多産的に、しかも力強く、板画を、全体的に生かす、抜いて制作された作品を見ません。特に白と黒の色彩の絶対を驚異を恐れ気もなく生み出し純質に生かし切っている作家は、特に希有と言えるとおもいます」。そして、丁寧に、送った作品一つひとつの評を書いてくださって、「私も暑い強烈な国と強烈な色彩とハダカが好きで、今もハダカで板画をやっています。SAYONARA」と結ばれていた。私が、版画家として、若くして独立出来た一因には、この版画の神様からの激励が一つの支えになっています』

グレート・ヴィクトリア美術館での二人展は、二人の仕事ぶりの超拡大写真が美術館の壁面一杯に飾られ、カナダで初めての棟方志功をお迎えするための行事が着々と大々的に進められていた。その矢先、1975年秋、志功先生が72歳の若さで他界された。それにはジョーンさんをはじめとして、多くのスタッフ、再会を夢見ていた私を愕然とさせた。

それでも、この大きな展覧会は、「MOKUHAN The Woodcuts of Munakata & Matsubara」というタイトルで、1976年の秋に開催され、グレート・ヴィクトリア美術館を皮切りに、プリティッシュ・コロンビア大学美術館、グレンボー美術館、そして、ウィニペグ美術館と2年間掛けて巡回し、その都度、亡き志功先生にかわって、私がオープニングに出席し、講演をして回りました。各地の新聞にも、素晴らしい評が次々と掲載されました。

VII イヌイットへの版画の指導

1985年初旬、トロントから北方1500マイル程の所にあるバフィン島南のケープドーセットに行き、若手のイヌイットが、集団創作、生産しているウエストバフィンCo-opで、木版画を教えて欲しいというカナダ国営映画局からの招きがありました。それと同時に、彼らが製作中の「イヌイット・ドキュメンタリー映画」の一環として、私の教室風景を撮影したいということでした。

カナダの美術を世界的にしたこの先住民のアートの事は、アメリカの大学院時代から本や展覧会を通して親しんでいました。また、40年代後半から15年近く北極に住み、イヌイットの彫刻の美しさを見だし、それらを世界に紹介し、彼らに版画の手ほどきをしたイヌイットの父と呼ばれるジェイムズ・ヒューストン (James Houston) とニューヨーク時代に親しくなり、彼の北極での面白い体験談を何度も聞いていたので、このアートとそれらを作った人たちを非常に身近に感

じていました。だから思いがけない映画局からの申し出を喜んで受け、5月半ば厚い冬支度に身をかため、北極へと旅立ちました。

着いてみるとケーブドーセットは、まだ氷と雪に閉ざされた人口900人位の新興村であり、大半の人々が政府のソーシャル・ウェルフェアを頼って生活していました。その中、約100人近い人たちが何らかの形の芸術に携わっていました。

のんびりと、北極見学をかこって出かけた私が、連日の版画教室の合間を縫って、ロケ班の撮影・録音、インタビューに同行し、白夜の中、老人アーティスト達の苦闘に満ちた半世紀に耳を傾けました。流水の様に押し寄せた白人文明により、何世紀も変わらず続いて来た生活が崩れ、全く別の社会組織の中におちこまれ、悶々としている彼らの悲哀に満ちた一語一語は、私たちの胸を刺しました。

木版授業も終了し、撮影を一応完了して帰途についた私は、イヌイット及びその芸術に関する文献をかぶりつく様に読みあさりました。そして、文筆とは全く無縁の生活を続けていましたが、貴重な体験から得たことを書かねばならないと強い衝動に駆られました。

そして、1985年9月27日から、12回にわたって毎週日加タイムスにエッセーを連載させていただきました。

たまたま、今月、オタワで開かれた Universities Art Association of Canada の「日系カナダ人アーティストについて」と題された学会に於いて、ロイヤルオンタリオ美術館・キュレーターのアーリン・ゲーマッハー博士が、「松原直子、ケーブドーセットと第三のスペース」と題する大変難しい講演をされました。そのために、彼女が、日加タイムスに載ったエッセーを全文英訳させたものに改めて眼を通す機会がありました。日曜礼拝参加、オットセイ生肉の昼食会、版画教室、年老いたイヌイット達へのインタビュー等など、掲載されたどの章を読み返しても、その時のことが生き生きと思い出されました。イヌイットそっくりだと村人にさわがれ、日本女性として初めての訪問者であった私は、皆に特別可愛がっていただきました。手作りの温かいトナカイの毛皮の上下を着せていただき、紺青の大空の下、360度ぐると純白に輝く地平線が果てしなく広がる氷の海上を、何10マイルもスキドゥーで吹っ飛ばした遠出の快感は忘れがたい思い出です。美しいソープストーンの彫刻、ラシャのアップリケの壁掛け、イヌイット版画は、その優れたオリジナルの世界を表現していて、世界中の人たちに愛され

ています。

VIII チベット旅行

1986年、夫デイビッドの率いるグループでの中国とチベットの旅に参加しました。この貴重な旅から戻ってすぐ、その翌年春に予定されていた日本橋高島屋での個展の為に、「チベット」と題する展覧会の準備に取りかかりました。

今まで、奈良、京都、中国、韓国の各地で訪れた数々の仏教寺院とは、全く趣きを異にするチベット寺院の印象を版画にしようと試みました。それが、何度繰り返しても全くできません。趣向を変えてチャレンジしても、一向に脳裏に焼き付いた美しい印象を私流の版画の世界に料理できないのです。3ヶ月間、松原直子これで一巻の終わりか、などと絶望的になりながら、この苦しみを噛みしめてがんばってみました。

仏教寺院を木版で一番的確に現わすには、白黒か単色の強い表現が合います。そのやり方で、過去にいくつかの神社・仏閣の作品を作りました。ところが、チベット仏教寺院では、どの寺院も、外観も、内部のありとあらゆる面や柱や天井が極彩色である上、金欄の帯のような旗が、何十と天井から吊るされていました。仏像はじめ、彫刻、飾り物すべてに、原色や金銀がほどこされ、原色の洪水でした。それなのに、チベット寺院の原色のオーケストラに浸っていると、不思議にも何か心が落ち着き、長い間寺院に座っていたい気持ちになる深い精神性を宿していました。そして色の静寂から一歩外に出ると、銀嶺の山々の背景にどこまでも青い澄み渡った空が広がっていました。

そしてやっと、色というものは、一つの精神であり、色と形を混同できないというある真理にたどりつきました。色そのものを敬えというリアライゼーションにたどりつけたのです。アーティストとして遅まきながら私の悟った抽象芸術への第一歩はチベット寺院、それらを作ったチベットの人々から教わることになりました。感謝にたえません。

それから、湧き出る様に数々の新しいチベット作品が出来、世界各地での個展でも、みなさんに「一つ、階段を上げられましたね」と褒めていただきました。1995年には、カルガリーのバイユー・アーツ出版社から、『チベットの空』と題する本が出版されました。また、この本の序文をグライ・ラマ法王に手紙でお願いすると、快く引き受けて下さいました。

「チベットを訪れ、感じる事から創られた松原直子の心のこもった版画の数々から、この雪の国、その

人々、そのユニークな文化をもつ国について、より多くの人々の認識を高める縁になるだろう」(グライ・ラマ)

IX 最後に

この講演を通して人生を振り返ってみると、木版画という一つの大きな軸を中心にして、年々歳々変化する生活そのものを教育として、あるいはインスピレーションとして発達してきたのが、私の人生だったと痛感しています。

9月一杯ヨーロッパを旅して戻ったばかりです。最初の一週間は、オランダ各地を見て回り、次の一週間は、二度目となりますが、美術館の宝庫であるベルリンに行きました。その後、行ったことの無いルーマニアを2週間旅しました。

大学院を卒業した直後、1962年から半年程の間、単身で貧乏旅行をしました。小田実氏の『何でもみてやろう』が、ちまたで騒がれていた頃です。若さにまかせて、安宿に泊まり、学生食堂のお世話になり、ピザとオレンジをかじりながら、ヨーロッパの大都会から町へ、町から村へと彷徨歩きました。自分の眼でしっかり見て、西洋美術の何に惹かれるのかを探し当てようと考えたのです。各地の美術館や寺院を好奇心の塊となって、かたっぱしから訪れていました。私が西洋美術に一番惹きつけられたのは、ヨーロッパで花開いた印象派から始まる現代絵画や彫刻でした。ですが、ルネッサンスよりもうんと古いエトラスカン美術、ロマネスク美術や、ビザンチン美術に何より惹かれ、心酔してゆく自分に気づいたのです。それらは、アートと切り離せない建築との融合、街全体をアートとした中世の芸術のあり方全体を含めたものでした。そこで、エトラスカン美術やロマネスク美術を求めて、フランスからイタリアへ、カタラン美術を求めてスペインへ、そしてビザンチンの発祥地ギリシャとトルコへと若さにまかせて歩き回りました。以来私の仕事は、その時の体験から、何らかの影響を受けていると感じています。

今回ルーマニアを訪れた大きな理由は、この国の地方に、中世に建てられたビザンチン美術の宝庫を秘めた寺院が山のようにあるのを知っていたからでした。東京の写真家で友人のIさんと二人で何週間もかけて練り上げた旅程に従って、山々に囲まれた秘境を12日間動き回りました。若い頃と比べると、気持ちのいいガイドと運転手つきで贅沢で悠長な旅だったと思います。これはこれで、一つの長い旅行記が書ける程豊かな経験でした。何世紀も変わらないたたずまいの村々にはひなびた寺院が多く建ち、寺院の外側の壁にも、内側の壁にもフレスコで描かれたビザンチン美術特有の2面性の強い美しい色彩の聖話が生き生きと描かれていました。また、山深い木造寺院には、木の壁全体に描かれた見事な絵が何世紀もの時間を経て健在であるのに接し胸おどりました。それらの多くは、村ごと、あるいは寺院全体が、ユネスコの世界遺産に指定されていました。これらの美術こそ現代美術の一つの大きな原点であることを強く感じました。

もう一つのルーマニア訪問の理由は、ルーマニアのガラチ美術館で開かれた国際木版画展に招かれたからでした。この美術館でのオープニングで多くの素晴らしい木版画家に会いました。作品それぞれは非常にモダンではあっても、この国の歴史を反映した暗い作品で、それは刺激となりました。また、生涯の友を得た嬉しさも味わいました。ガラチのホテルの部屋から、窓の下に巨大なドナウ川が眺められ、それが、黒海に入る水面に夕日が沈む光景を眺めながら、随分遠くまで旅してきたという感慨を味わいました。

ご清聴、誠にありがとうございました。

(本稿は第54回日本教育心理学会における「招待講演1」の講演者の下書きをもとに作成したものである。当日は本人の作品や写真などのスライドとともに話された。一部省略や文言の手直し等があり、講演者の意図を反映できていないところもある。富永美由紀)